

2. 1巡目、2巡目(H2年度～H12年度)の全国 109水系・88ダムとりまとめ結果の概要

1) 全国の河川及びダム湖における生物の確認種数の状況

日本の国土面積の約0.7%を調査対象とした河川水辺の国勢調査において、多くの野生生物を確認しました。

河川は、野生生物の重要な生息環境であることがわかります。

河川で「日本野生生物目録」掲載種の約8割の魚類を確認。

河川で「日本産鳥類目録」掲載種の約6割の鳥類を確認。

ダム湖で「日本野生生物目録」掲載種の約7割の両生類を確認。

今回、2巡目調査となる平成8年度から平成12年度（一部は平成13年度）における現地調査結果を用いて、日本全国の一級水系109水系123河川および88ダムにおいて確認された動植物の種数を下表にとりまとめました。

魚類調査において、「日本産野生生物目録」掲載種である汽水魚・淡水魚の確認状況については、河川では85%(169種)、ダム湖では78%(156種)の種が確認されています。また、河川では鳥類の約57%、ダム湖では両生類の約66%の種が確認されています。

このように、主な河川水辺の国勢調査の対象となる一級水系123河川の調査対象面積約2500km²は、国土面積378千km²の約0.7%にすぎませんが、日本に生息するとされる「日本野生生物目録」等の掲載種の多くの生物種が確認されています。このことから河川は、野生生物の生息環境として重要なことがわかります。

表 一級水系109水系および全国88ダムにおける動植物の確認種数

	調査項目	確認種数	「日本産野生生物目録」等掲載種数	確認率 / ×100
河川	魚類（淡水魚・汽水魚）	339(169)	200	85%
	植物	約3,200	8,118	39%
	鳥類	321	568	57%
	両生類	26	59	44%
	爬虫類	16	87	18%
	哺乳類	65	188	35%
	陸上昆虫類等	約9,500	33,220	29%
ダム	魚類	156	200	78%
	植物	約3,700	8,118	46%
	鳥類	240	568	42%
	両生類	39	59	66%
	爬虫類	33	87	38%
	哺乳類	77	188	41%
	陸上昆虫類等	約9,900	33,220	30%

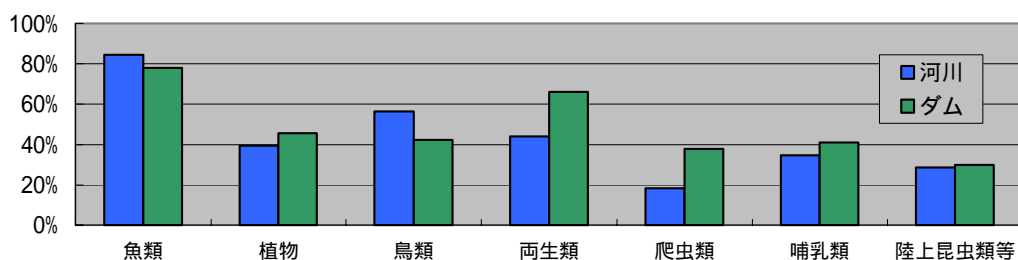
注1) 植物と鳥類を除く各調査項目は、環境庁「日本野生生物目録」の種数を掲載。

注2) 植物は環境庁「植物目録1987」の維管束植物の種数を掲載。

注3) 鳥類は「日本産鳥類目録改訂第6版」の種数を掲載。

注4) 魚類の「日本野生生物目録」の200種は淡水魚、汽水魚が対象。河川での国勢調査結果では海水魚を含む。(169)はそのうち「日本野生生物目録」に記載されている淡水魚、汽水魚の種数を示す。

現地調査確認種数の日本産野生生物目録等の掲載種数に占める割合



2) 代表的な種の全国の分布状況

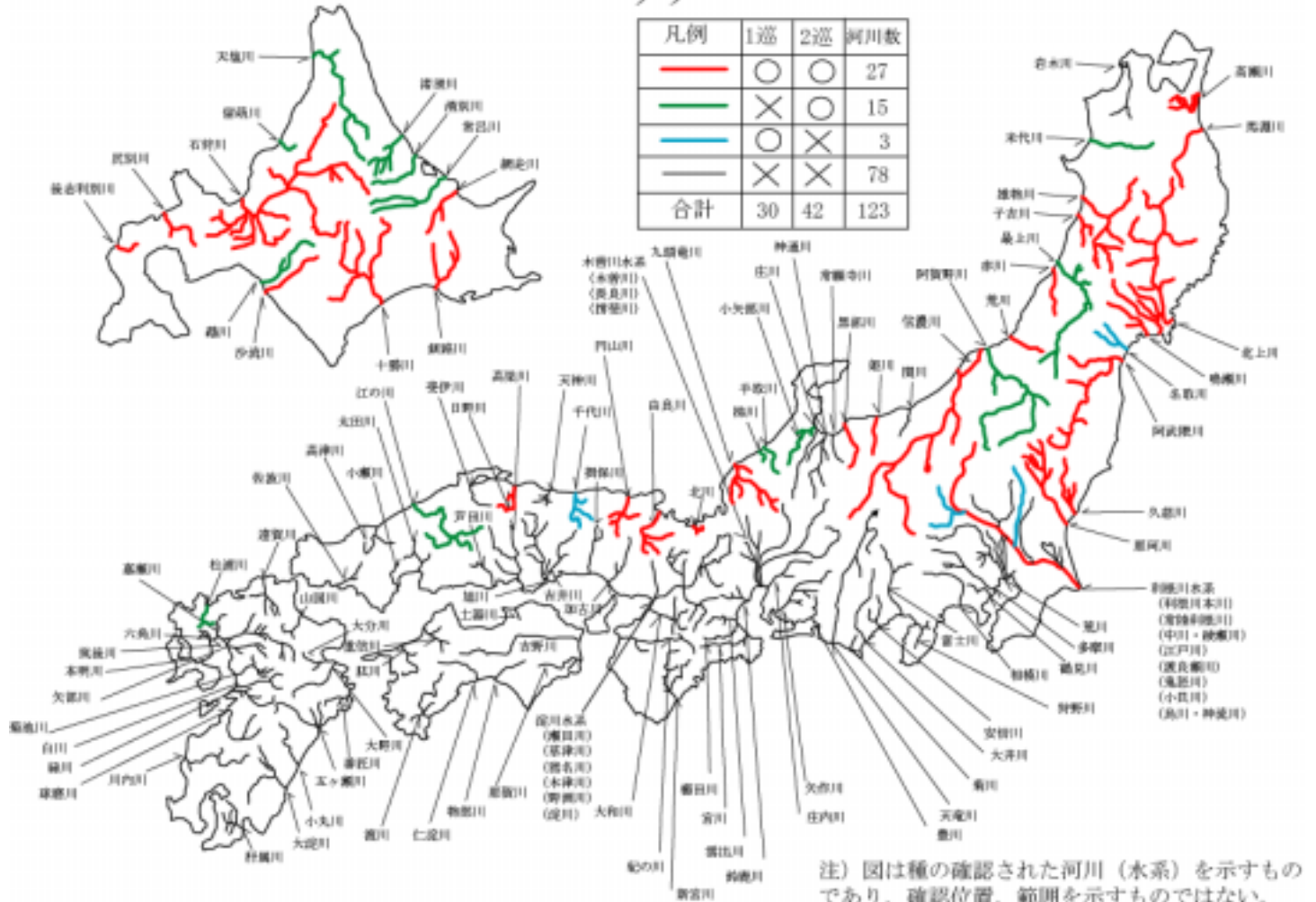
【サケの分布状況】

北海道の全河川、日本海側では本州から九州の松浦川に至るまで、太平洋では東北から利根川に至るまでの河川で確認

東日本の食文化を代表する魚種であるサケは、母川回帰（生まれた河川に帰って来る性質）を行うこと等から、河川でのシンボリック的存在として取り上げられる種でもあります。

河川水辺の国勢調査では、北海道の全河川、日本海側では本州から九州の松浦川に至るまで、太平洋では東北から利根川に至るまでの河川で確認されています。記録によれば、日本海側に流れる河川では、九州北部でもしばしばサケが遡上することが知られています。河川水辺の国勢調査結果では、日本海側の河川の中で中国、九州での確認が少ない傾向がみられました。

サケ



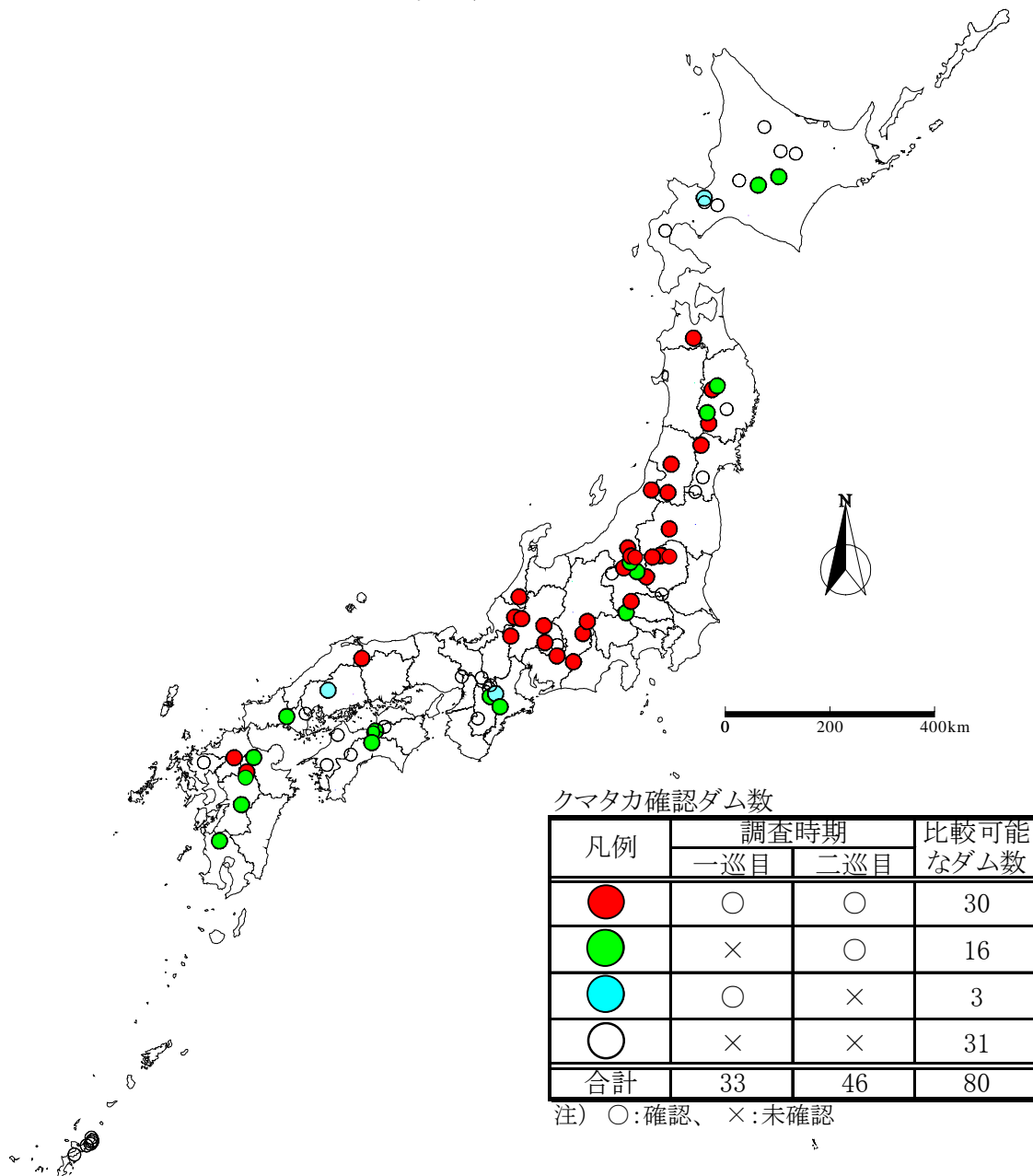
【クマタカの分布状況】

半数以上のダムで、クマタカの生息を確認。

食物連鎖の上位に位置する生物種の生息状況が、下位に位置する生物を含めた地域の生態系の指標となるという観点から、ダム湖周辺環境における生態系の高次消費者である猛禽類のクマタカの確認状況を整理しました。

クマタカは環境庁のレッドリストで絶滅危惧 B類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に指定されており、自然環境を保全する上でしばしば注目されている種です。ノウサギなどの中型哺乳類やヘビ類、他の鳥類を主な餌としているため、これらの餌となる動物が生息する環境が残されている必要があります。

二巡目調査が実施された80ダムのうち、クマタカは半数以上の46ダムで確認されました。



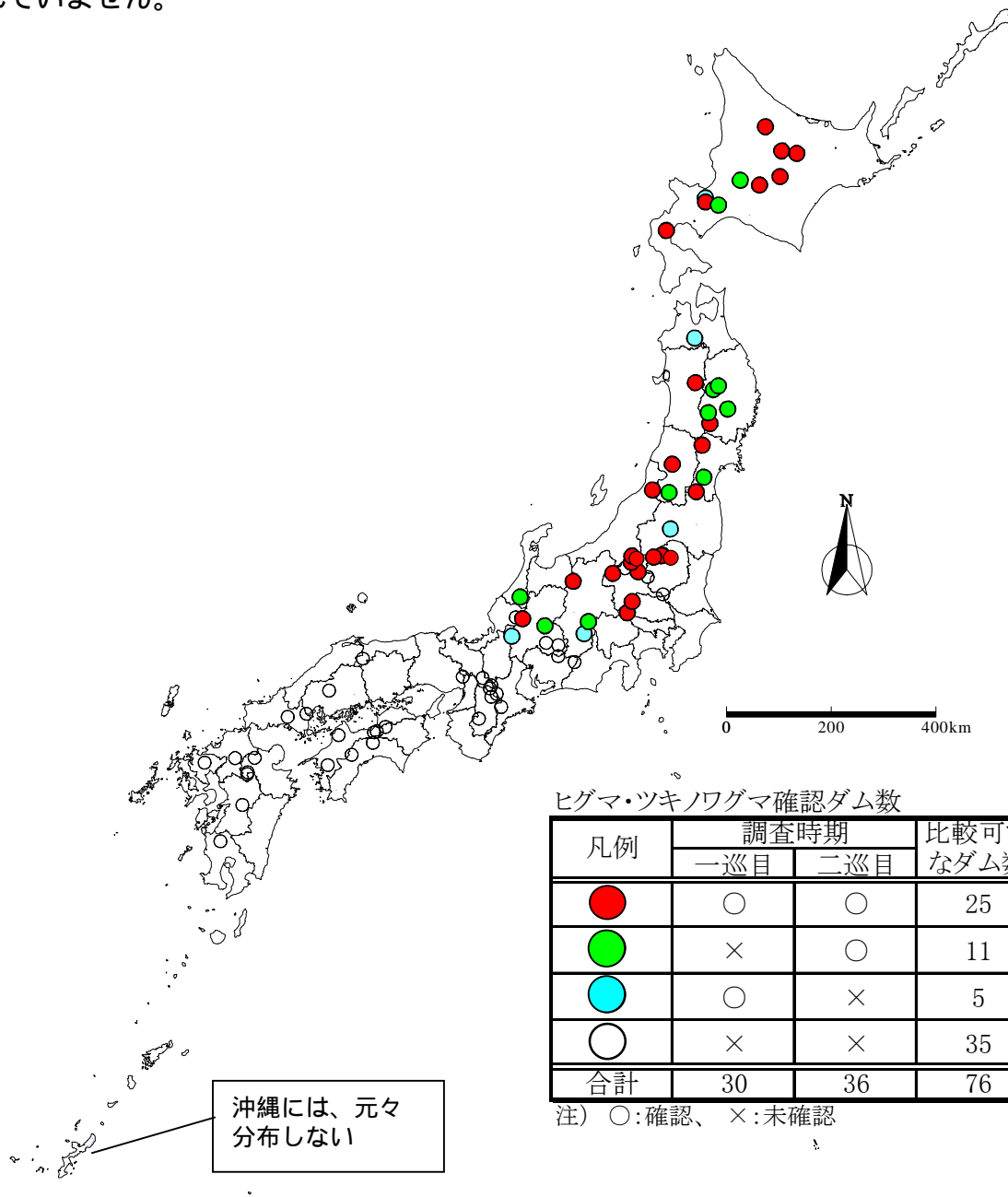
【ヒグマ・ツキノワグマの分布状況】

中部以東のほとんどのダムでクマの生息を確認。

北海道に生息するヒグマ、本州以南に生息するツキノワグマなどの大型哺乳類は、行動圏が広く、木の芽や木の実、アリやハチなどの昆虫類などを多量に採食するため、まとまりのある自然林を必要とし、ダム湖周辺の森林環境の豊かさを表す指標として挙げられます。

二巡目調査の結果、元々これらが生息しない沖縄のダムを除いた76ダムのうち、約半数の36ダムでクマ（ヒグマ・ツキノワグマ）が確認されました。

また、分布状況を見ると、ヒグマは本来の分布地である北海道で、ツキノワグマは東北、関東、北陸、中部のダム周辺で確認されており、近畿以西のダム周辺では確認されていません。



4) 外来種の分布状況

外来種の生息域が拡大傾向

～ 河川の2巡目調査では、3河川でコクチバスを新たに確認～

河川水辺の国勢調査で確認された外来種のうち、代表的な種について1巡目と2巡目の確認河川数を比較しました。

近年、外来種は生物多様性を保全する上で最も大きな脅威の一つとして認識されており、人間が意図的・非意図的に持ち込んだ外来種が、侵入先の在来種を捕食、競争、病害などによって減少させたり、在来種と交雑したりすることにより、在来種の絶滅の可能性を高めるなどの問題を引き起こすことが、これまで多くの事例から明らかにされています。

魚類のうち、在来の魚介類を捕食することで問題となっているブルーギルとオクチバスは、確認河川数および確認ダム数が増加しています。また、コクチバスは、1992年頃から長野県野尻湖や木崎湖、福島県檜原湖で相次いで確認された種で、その後急激に分布を拡大していると言われています。河川での河川水辺の国勢調査の結果、1巡目では全く確認されませんでした。2巡目調査では3河川で確認されており、今後の分布域の拡大を注意深く監視する必要があります。

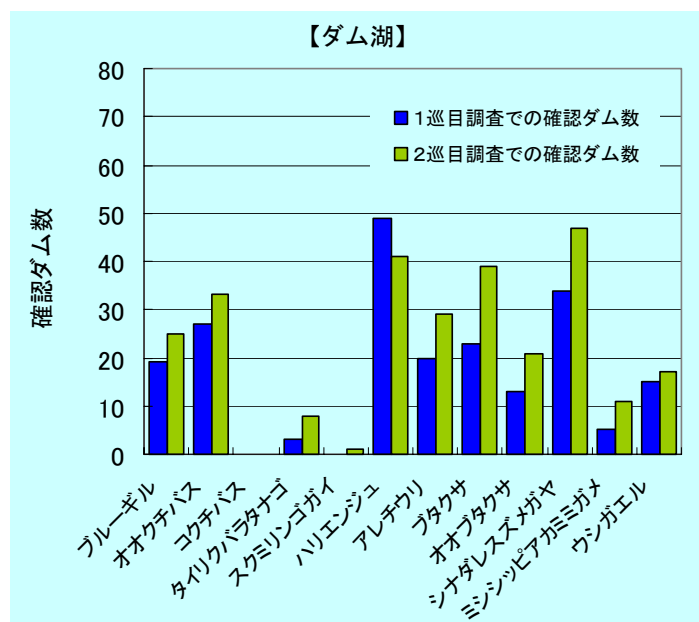
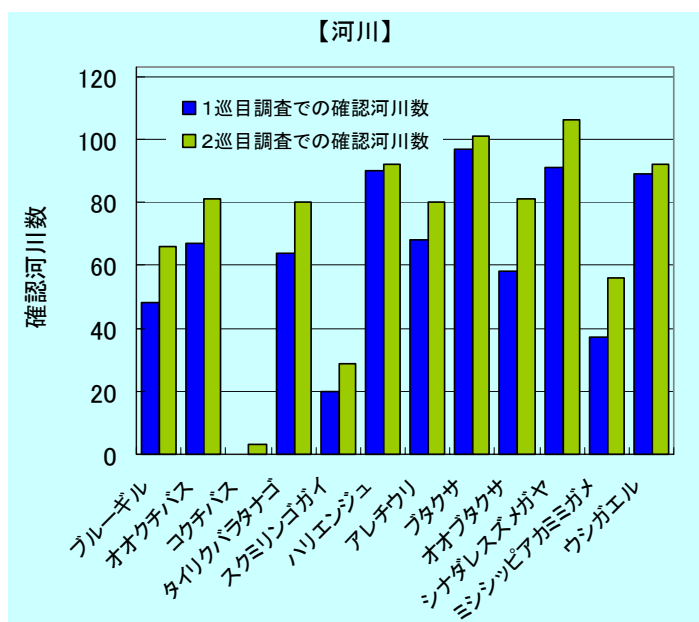
魚類以外の種をみても、ここで採り上げた代表的な外来種の確認河川数は、いずれも増加もしくは横這いです。また、ハリエンジュ、ブタクサ、アレチウリ、ウシガエルは90河川以上で確認されているなど、すでに多くの河川に分布している種も少なくありませんでした。

確認した河川数およびダム数が少ない外来種についても、人為的に分布を拡大したり、在来種に影響を及ぼす可能性があるため、今後ともモニタリングを続けていく必要があります。

代表的な外来種の確認河川数および確認ダム数

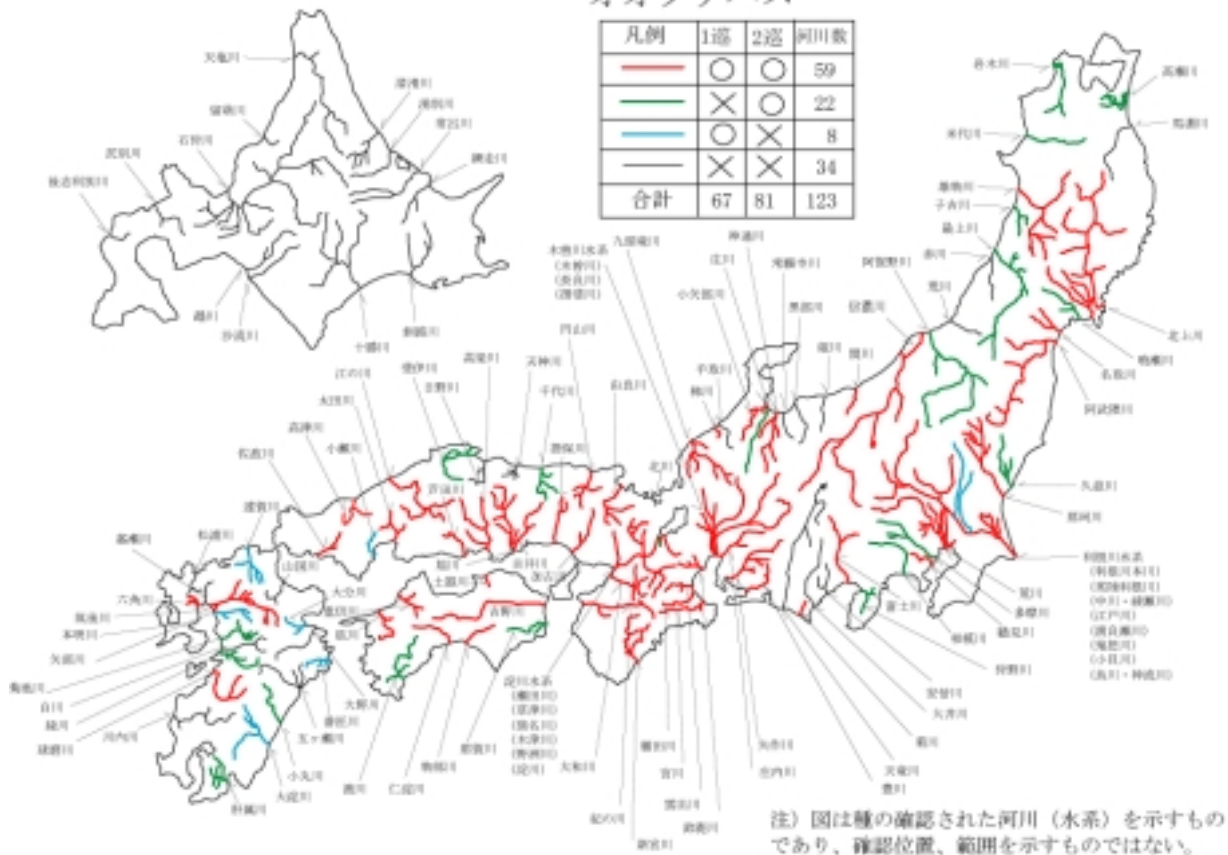
調査項目	種和名	確認河川数		確認ダム数	
		1 巡目調査	2 巡目調査	1 巡目調査	2 巡目調査
		H 2 ~ 7 年度	H 8 ~ 12 年度	H 2 ~ 7 年度	H 8 ~ 12 年度
魚類	ブルーギル	48	66	19	25
	オオクチバス	67	81	27	33
	コクチバス	0	3	0	0
	タイリクバラタナゴ	64	80	3	8
底生動物	スクミリンゴガイ	20	29	0	1
植物	ハリエンジュ	90	92	49	41
	アレチウリ	68	80	20	29
	ブタクサ	97	101	23	39
	オオブタクサ	58	81	13	21
	シナダレスズメガヤ	91	106	34	47
爬虫類	ミシシippアカミミガメ	37	56	5	11
両生類	ウシガエル	89	92	15	17

注) 対象河川は一級109水系123河川、対象ダム湖は魚介類78ダム、植物77ダム、爬虫類、両生類81ダム。



【オオクチバスとコクチバスの分布状況】

オオクチバス



コクチバス

